

風雲恒春城 Part2 1898年（明治31年、光緒24年）恒春城包囲事件の社会状況

紙村 徹

立教大学アジア地域研究所 特任研究員

【要旨】

いわゆる牡丹社事件の制圧のために出兵した日本軍の撤収後、1875年に清朝は恒春城を建設し、恒春地方の直接統治へと乗り出した。この政治状態は1896年の日本による台湾領有まで続いた。このほぼ20年の期間に、「恒春下蕃」と通称されてきたパリジャリジャオ首長国に帰属する首長同士の身分階層制に基づいたダイナミックな社会関係の枠組みはほぼ解体され、恒春知懸によって固定された首長同士の位階序列が維持されていた。1896年の日本軍の恒春進駐によって、日本軍政は清朝の統治方式を継承し、さらに首長同士の位階序列性を一切無視し、十把一絡げに首長層を取扱い、各首長たちを形式的平等状態に置いた。つまりパリジャリジャオ首長国は社会集団としてはほぼ完璧に瓦解・解体されたとみられる。各首長たちは個別的に日本軍政に接近し、うまくいけば日本から甘い汁を吸えたし、日本国から叙勲されたケースもあった。しかし首長層以下の一般平民層は多くが帰属し一体化すべき集団ももたずに、根無し草としてリーダーからリーダーへと彷徨っていく。すなわち日本統治者を焦点としてその距離のみによって人々が位置づけられるようなGrid中心的な体系の非人格的支配が全面展開することとなった。こうした社会状況のなかで、1899年の恒春城包囲事件が起こる。包囲側の首謀者はパイワン族に隠匿された漢族系のならず者で、しかも多くのパイワン族が動員された。さらに頭目とその配下であるはずの平民とが敵味方に分かれ、恒春城内に軟禁された総頭目まで反乱側のリーダーとして担がれる始末だった。これは一種の「千年王国運動」のごとき社会運動と見ることができる。

キーワード：パリジャリジャオ首長国、Grid中心的な体系、非人格的支配、根無し草、千年王国運動

風雲恆春城 Part2 1899 年（明治 31 年、光緒 24 年）恆春城包圍事件之社會狀況

紙村 徹

立教大學亞洲地域研究所 特任研究員

【摘要】

為壓制所謂牡丹社事件而出兵的日本軍隊撤回後，1875 年清朝建造了恆春城，開始了對恆春地方的直接統治。如此之政治狀態，一直持續至 1896 年，日本統治臺灣為止。在這將近 20 年的期間，被通稱為「恆春下蕃」的 paliljaliljau 首長國（酋邦）中，基於首長間的身分階層制度形成的具強大機能之社會關係架構幾乎解體，因恆春知縣而形成維持著固定首長之位階序列。1896 年，因日本軍隊進駐恆春，日軍政府承襲了清朝的統治方式，更無視於首長間的位階序列性，對於首長層級更是籠統地一視同仁，使各首長們成為形式上的平等狀態。也就是 paliljaliljau 首長國，以社會集團之狀態幾乎完全瓦解了。可以視之為被解體了。各首長們各別接近日本軍政，也有因而順勢吸收了來自日方的好處，得到來自日本國敍勳的例子。但首長層級以下的一般平民們大部分都無法歸屬於應成為一體化之集團，反而是如浮萍般遊離彷徨在各領導之間。亦即是以日本統治者為焦點，全面展開了非人格之支配，也就是依其距離定位每個人的 Grid 中心體系。在此種社會狀況下，於 1899 年發生了恆春城包圍事件。包圍的主謀者不僅是藏匿在排灣族的漢族，同時也動員了眾多的排灣族。更甚者，頭目及應為其支配者之平民亦區分為敵我兩方，被軟禁在恆春城內的總頭目還擔任著平亂者之領導。這可視為是如「千禧年主義運動」般的社會運動。

關鍵詞：paliljaliljau 首長國、Grid 中心體系、非人格的支配、浮萍、
千禧年主義運動

（譯者：胡家齊）

1. 1873年から1898年までのパリジャリジャオ首長国の社会状況

: 1873年、牡丹社事件の際に、スカロ大頭目潘文杰はいち早く日本軍に寝返り、牡丹社、高士佛社など抗日派と袂を分けた。

↓

スカロ大頭目とパイワン系頭目との藩属関係が解体し、スカロ大頭目の権威劣化（Group 低下）

儀礼的交換によって表象されてきたスカロ大頭目とパイワン系頭目衆との身分序列関係の不明確化（Grid 低下）

スカロ大頭目の領域内に深く入植している客家人は、スカロ頭目を単なる地主視しているだけ⇒スカロ頭目の霊威が不明確化（Grid 低下）

: 1875年、清朝が恒春縣設置による恒春地方の直接統治移行

恒春知懸は、招撫策として頭目衆に対し修髮料下賜制を導入
修髮料下賜制には、頭目衆の格付けがあつた

潘文杰は清朝五位官恒春縣総頭目に任じられる

新街から紡寮まで隘寮を建て、1000人の兵を配置（屯田兵）

⇒首長国の境界侵犯

パリジャリジャオ首長国人口約3000人

（まもなく人口比逆転）

↓

スカロ大頭目とパイワン系頭目との間の身分序列関係の固定化
⇒（Grid 上昇化）そして（Group 消滅化あるいは0点近くに低下）

↓

自己中心的 Grid 体系への移行

2. 1875年から1895年までの清朝恒春縣時代の社会状況

: 大股頭目としての最後の域内紛争の仲裁介入

= 1888年、加芝来社の頭目と配下の騒動→頭目は港口庄へ逃亡し
帰還せず

→潘文杰は加芝来社へ代理頭目を派遣

: 1889年、1890年、1892年、1893年の福建系漢人入植者とパイワン

族との騒動・血酬事件には、潘文杰はまったく仲裁介入せず、あるいはできなかつた？

ただし 1890 年から 1893 年までの、牡丹社と車城庄との血酬事件の連鎖には、潘文杰は恒春知懸の強制的依頼に応じて、牡丹社の騒動首謀者を捕縛し、恒春城へ連行→潘文杰はあくまでも清朝下級役人として逮捕に向かったにすぎない



うまく恒春知懸に取り入れた者だけが、得をするという単純化された社会関係

(自己中心的な Grid 体系のさらなる高度化)

(うまく取り入れられなかつた連中はどう生きていいか?)

3. 1895 年から 1898 年までの日本統治開始期の社会状況

: 日本の手当金給付制⇒清朝期の修髪料下賜制を踏襲したが、頭目同士の格付けを廃止

⇒スカロ頭目とパイワン系頭目との固定化された序列関係を無化した。



「法の支配と法の下での平等」原理の適用⇒原理・規則のみが支配する非人格的支配の体系への移行(自己中心的な Grid 体系の高度化)

その一方で、台湾総督府民政部恒春出張所は、日本にとって「かわゆい頭目」を優遇した

⇒頭目同士の格付けは、あくまでも日本統治者の意思のみによって決定された (日本統治者の意思に求心化された Grid 体系)

: 潘文杰は、日本への忠誠心によってよく日本統治者に信用されていた

勲六等瑞宝章授与

猪臘東社に国語伝習所分教場設置

内地観光

日本兵によるクラルツ社民の誤射と焼き払いの賠償を解決

清国守将劉徳杓の残党の反乱を、恒春出張所相良長綱とともに鎮圧

自己中心的な Grid 体系によって恒春地方が高度に組織化されていく

と、必ず日本統治者にうまく取り入ることに失敗する者、日本に恭順するのを潔しとしない者が出現する

↓

かれら落伍者たちは、いつそう人間らしい扱いを受けるために、リーダーからリーダーへと点々と移動せざるを得ない。他の人々との関係は希薄で、当てにならない。根無し草。(Grid 軸と Group 軸の 0 点近くに位置する人々)

= 四林格社、竹社、八瑤社、龍鑾社、猫仔社、などの社民が、本来仲が悪い筈の福建系の陳掌・蘆招元をリーダーに担ぐ

= 福建系車城庄民陳掌も、アヘン密売で行き場がなく、山中のパイワン系番社に隠匿される。福建系四溝庄民蘆招元は 1895 年に恒春城襲撃失敗し、山中に逃亡。パイワンけい蕃社に匿われる。

4. 1898 年 12 月恒春城包囲事件

- あたかもモノや規則によって支配されているかのような非人格的支配の日本統治下でも、その蔭にずるい、あるいは脆弱な人間が隠れ潜んでいることが「発見」されるや、途端に熱狂的な狂信的な「千年王国運動」的な爆発を産み出す。

例：牡丹社事件の時と同様に、強大と思われた日本軍が、意外と兵備・兵員不足で撤収せざるをえなかった。

① 土匪リーダーたち

- ：土匪リーダー蘆招元や陳掌は、総頭目潘文杰を勝手に「大元帥」と担ぎあげる
- ：土匪リーダーは、1898 年 12 月鳳山の清国残党林少猫蜂起に、相互の連絡もなしに勝手に呼応し、決起する
- ：いかにも軽率で不真面目な救済手段の提案＝恒春城の日本人を殺戮して、清国治下に復帰すれば、大いに恩賞に与るであろう

↓

【没知性的な軽はずみな象徴】：清朝復帰、林少猫との連帯、潘文杰大元帥、

② 根無し草のパリジャリジャオ・パイワン族たち

- ：土匪蜂起側の与した人々 250 人が、恒春城を包囲した
- = 四林格社民、竹社民、八瑤社民、

龍鑾社民、猫仔社民

↑

：城内守備兵 52 人に味方した人々
＝猪臘束社民、蚊蟀庄民（客家系か？）、クラルツ社民、
巴姑角社民（アミ系）、
射麻裡社民

- 四林格社、竹社、八瑤社は、従来はどちらかと言うと仲が悪く敵対していた福建系人をリーダーに戴いている。しかもかれらは元来は射麻裡社二股頭目マヴァリユー家に藩属していた。
- 城内で日本兵に味方した人々は、猪臘束社大股頭目ラガルリグル家に藩属した蕃社が多い。さらにラガルリグル家と競合していた二股頭目マヴァリユー家も味方した。マヴァリユー家に藩属していたはずの蕃社が蜂起側に加担した。
- パリジャリジャオ首長国の支配層スカロ頭目四家は二つに分裂し、日本に味方した社は猪臘束社と射麻裡社で、蜂起側は龍鑾社、猫仔社。
- 潘文杰とその一党は日本側によって、予め城内に留められたが、他方で蜂起土匪によって「大元帥」として担ぎ上げられた。
- 潘文杰の父方姉妹の息子の息子たる潘阿力は城壁を飛び越えて城外に逃亡し、潘文杰の意思を蜂起側に伝えた。（潘文杰の意思とは何だったか？）